明治四十一年十二月十五日發行
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明治の女子

明治の女子
第五卷第十一

クリスマス號

明治四十一年十二月十五日

保羅の宗教的生活（論說）　柏井園
德富健次郞先生を訪ふ（訪問）　記者
不滅（小說）　後藤淺香
クリスマスの夜（小說）　ユーゴー
友か宿（長詩）　堺いよ
千曲川（長詩）　猪野隼夫
戸山の原の夕陽（美文）　櫻畜生
郭公の生ひ立ち（翻譯）　井筧節三
明治の女子第五卷總目錄（附錄）

…に我等召されてキリストの使者となれり。…

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雜誌也。

「明治の女子」は一年分郵税共金五拾錢一部郵税共金五錢とす。

日本基督教女子青年會は青年女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。

日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長　エム、エ、ホイツトマン
副委員長　岡見憲子
記録書記　エ、ジー、ルイス
會計　フィシャー
萬國基督教女子青年會同盟委員　河井道子
萬國學生基督教同盟會委員　宮川すみ子

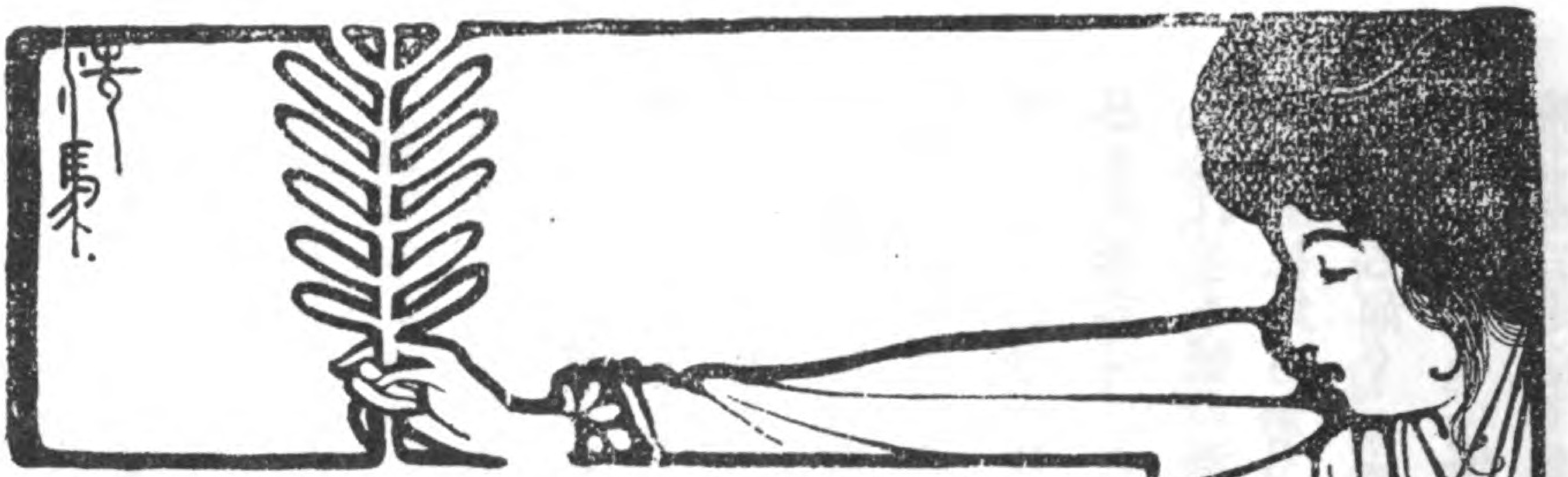
東京在住委員
津田梅子　渡部瀧子
エ、ビー、ウエスト　井上友子
平野濱子　鈴木歌子
中島小春　井深花子

地方在住委員
大坂　ケー、ツリスツラム　京都　松田道子
京都　ジ、エス、フエルプス　仙臺　エル、ザフルー
名古屋　イ、エム、ソーパル　廣島　エヌ、ジー、ゲインス
日本女子基督教青年會幹事　エー、シー、マクドナルド
同副幹事　エス、シー、フキツシャー

明治四十一年十二月十三日印刷
明治四十一年十二月十五日發行
東京市麹町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人　エー、シー、マクドナルド
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

日本基督教女子青年會の事に付き御尋れの節は東京麹町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



袂別入營の辭

不才任を本誌編輯に承けて執筆校正の責に當る正に一年有餘、其間力足らす、才及ばず素志の萬が一をも實現する能はずして、徒らに讀者諸姉の要望に背きしは、余の深く慚愧に耐えざる所。されど今や靑年會名譽主事丹羽先生監督の下に學友井箆節三君遠大の抱負を以て編輯の實務を執らる。余か平生得んとして得る能はざりし本誌發展の大業は、日ならずして實示せらるゝの期あるべし。余は此事實に向つて深く先生の厚意を謝すると共に、本誌の爲に大拍萬歲を叫はずむばあらず。

本誌は今クスリマス號を發刊し、新春と共に大に誌上の面目を改めんとす。余が本誌に對する編輯事務の最終局たるは、情として思ふ能はある所なるも、本誌に取りては蓋し望外の幸運ならん。

我れ今敎職を抛ち、筆硯を捨て、馴れぬ肥州の營門に入りて、日夕銃劍の武具と親しむ。頭腦の働は四肢極度の運用となり、靈の活動は肉體の營役と變す。見るもの、聞くもの、亦昔日の興樂なく、四圍の風光大に其趣を異にす。而も倘ほ身邊の激變却つて余が詩趣神感を湧奔活躍せしむるものあるは、神魂倘ほ我が身上を離れざる一證とも見るべき歟。

さるにても雜誌『明治の女子』。一爾が健全なる發達は、即て是れ國家社會の發展――宇宙人類の進化也。願はくは西肥の一隅、絕えず祈禮と希望とを以て、爾が必然享け得べき妙に麗はしき容姿を期待しつゝあるを忘るゝ勿かれ。

（十二月八日、佐賀步兵第五十五聯隊の一室に於て‥‥櫻裔生）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

保羅の宗敎的生活

東京神學社敎頭　柏井園

宗敎の在るところには宗敎的生活あるべきはずなり。何となならば宗敎は單に思想にあらず、學問にあらずして、主として生活の力なり理想なり又主義なればなり。世には宗敎的生活なき宗敎を見るとてなきにあらざれども斯る宗敎は宗敎の價値ありと云ふべからず。今吾等は保羅の宗敎的生活、即ち保羅が宗敎的生活に就きて敎へし所のものよりも保羅自身の實行せし宗敎的生活の一班を語り、基督敎的生活とは如何なるものなるかを研究せんとす。

宗敎的生活に就きて保羅が最も多く吾等を敎へ得る所以少くとも三つあり。(イ)彼れは親しく基督に接して敎を受けたる人にあらず、故に神の助を求め自ら研究し工夫して信仰的生活を營まざるを得ざる地位に立てり。(ロ)基督一代の敎訓は先づ主としてユダヤ人なる弟子の爲めに陳べられたり。固より其精神は世界的なれども其形式はユダヤ人なる聽衆の程度に應ぜんがため多少制限せられざるを得ざりき。保羅も躬は猶太人の一人なれども彼の敎を聽し人は異邦人なり。生活狀態の頗る相異なる異邦人の爲めに宗敎的生活の規範を立つべき責任を負へり。これ實に容易なる事業にあらず今日吾等が西洋に發達し來りたる基督敎生活を東洋に飜譯しつゝある如く、保羅は昔し東洋に生れ出でし宗敎を西洋の生活に飜譯したりしなり。(ハ)加ふるに保羅は絶大なる思想家にして何事も苟もせず、自ら研究し根本主義より割出さずんば滿足せざりしなり。此事を知るべき一事は彼が轉心後直ちにペテロ、ヨハネ等を訪はず先づアラビヤに退きて靜思を凝し又ダマスコに往きて傳道を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

試み三年を經て後、初めてエルサレムに上り基督の弟子に面會せしことなり。假に彼が轉心後直ちに保羅等に會ひしとするも果して何を質し、何を問ひ得べきや。恰かも下讀せずして、教場に出づるごとく唯受動的に聽くのみにして自得の境に入ること難かりしならん。然るに自ら研究し又試みに人に語り質すべき問題明瞭となりし後、ペテロ等に會ひて之を叩きしことなれば得る所頗る大にして僅か十五日間の滯在も他人の五年十年の間に受け得る益を受け得しならんと察せらる。基督教を研究するもの斯くの如き獨立の見識と勇猛なる研究心なかるべからず。

保羅の宗教的生活は三方面に分ちて語ることを得べし。其一は修養的方面なり。二は活動的方面なり。三は神秘的方面なり。此の文章に於てははじめの二つのみを語らんとす。先づ修養的方面に就て語らんか。彼れは宗教的生活の統一に達せんとして苦心せり。名人の書には統一あり。宗教的生活も亦然り此統一を害する所の危險尠からざるが故に保羅は警戒怠りなかりき。其危險の一つは保羅の言葉を借りて云へば「人を教へて自ら棄てらるゝこと」(哥前九〇二七)なりき。傳道者なるが故に斯く語らざるべからずと云ふ如く、自己の確信より語るにあらずして職務柄之を說くと云ふ如きことは保羅に最も忌むところなり。ガラテヤ書末章に於ても彼は自ら欺くことなからん事を懇ろに戒めたり。何となれば斯の如きことは宗教的生活の兩面を設け、兩柄を使ふ如きものにて一切の方便若くは秘密の教理を排斥する基督教の生活に在るべからざることとなればなり。基督教の誇る所を棄つることゝなればなり。保羅は如何にして此危險に勝ち得しか。

第一に彼は自ら省み自ら檢することを力めたり。哥林多前章十一章二十八節に『自ら省みて』とあり、加拉太書六章四節に『各其の行ところを勘へ見よ』とあり又哥林多後書十三章五節に『自ら省み自ら誠むべし』とあり。此等の原語は皆一つの字にして例へば牛乳の良否を驗するに或方法を用ふる如く事に觸れて己の精神の純

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なると否とを驗するは保羅の常に力めたる所なりしと見ゆ。

保羅が上に言ひし危險に勝ちし途はたゞ自ら省察し自ら試驗するに止らず之に加へて一層精神的の方法を用ひたり。即ち當然爲すべきよりも以上の事を爲したりき。彼は哥林多前書九章に於て此事を語りたり彼はペテロを始め他の使徒の如く妻を携ふる權あるを知れり。然れども彼は獨身の生涯に甘んじたりき。傳道する者は傳道に由りて衣食を得るの權ある事を知れり。然れども彼は天幕を造りて自活せり。斯くの如く人は義務として爲すべきよりも以上の事を喜んで爲す時は初めて精神的自由の天地に飛揚し、言ひ難きの祝福を感ず。これ宗敎が道德以外に有する獨特の天地なり。基督が人汝の右の頰を搏ば、他の頰をも向けよ、一里の公役を强ひなば、これと供に二里往けと敎へ給ひし意味は必ずしもトルストイの如く解釋せずとも、此意味に解すれば自ら釋然たるものあるべし

爲すべきよりも以上のことを爲す人に生じ來る他の危險あり。即ち心靈的の高慢これなり。保羅は世俗の所謂謙遜てふ事に拘泥せず、誇るべき所は淡泊に誇ることをせり（哥林多後書十一〇五、十、十六、十八）。誇の在る所、權威あり、人は何物か誇る所又恃む所のものを有せざるべからず。保羅は其家柄に於て、學問に於て功勞に於て、特に神より賜はりし光榮地位に於て多くの誇るべきものを有したり。從つて心靈的の高慢に陷るの危險も亦多からざるを得ず。如何にして彼は此危險に勝ちしか。彼は哥林多後書十二章七節に於て傲ぶること無からん爲めに一つの刺を肉體に與へられたる事を語れり。この刺とは何を指すか、眼病なるか癲癇なるか或は餘りに神經質なりしか、學者の說も區々にして定むるに由なけれど兎に角く保羅が切に無かれかしと思ふ所又人に言はるゝをつらく感じたる弱點其身に在りし事を察せらる。神は何人にも斯る弱點を與へ給ふ。これ實に苦しき刺にして保羅の如く三度神に祈りて之を脫せん事を求めたるは、多くの人經驗より同情し得る所な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るべし。然れども我等が謙りて我れ弱く神強きを知り向上發憤の志を與すは此弱點に負ふ所あるに非ずや。詩人のうちこの理の消息を語りて最も良く我等を慰め又教ふるものはロボルト、ブラニングなり。彼の『ラビ、ベン、エズラ』と題する詩の一節に曰く

平坦なる地をかき起す、
波瀾いづれも善くぞ來ぬ。
坐せしめず、立たしめず、
たゞ行かしむる刺もまた、
我等の歡喜の三分は苦痛なれ。
勉めよ勞苦を輕く視て。
學べよ痛みを事とせて。

同じ人の『聾と啞』と題する短詩にもこれあり。

三稜鏡に遮らるればこそ、
日光の秘密正しく露され
白き光碎けて虹ともなるなれ。
光榮この如く缺目より來れかし。

然れども保羅が高慢に流れんとする危險に打勝ちし、より根本的なる方法は基督の愛に感じたるに由る。罪人のうち首たる我に恩惠を下して斯くならしめし基督の愛を思ひ十字架の精神に感動する時如何にして區々たる己が學識才能を誇ることを得べき。斯くて淡泊に誇るべきことを誇りたる保羅は神の前に碎けたる魂を捧げ

て深く謙る人となりしなり。彼はピリピ書第二章に於て最も良く此の心事を語りたり。

以上は保羅の宗教的生活の靜的方面なり。今進んで彼の動的方面を觀んとす。活動の全局に及ぶことは固より望むべからず、寧ろ活動の方針とも云ふべき事に限らんとす。彼は何事をなすにも主義を守り方針を立て理想を眼前に置きてなす人にてありき。然して我等が注意すべきことは、此等の主等方針が彼の活動を制限し天馬空を行く如き勢ある彼の天才を拘束したりしやと云ふに、さにあらず却て彼を導きて一層濶大なる天地に入らしめしことこれなり。之につきて余は一の例を擧げんとす。傳道するに當りて先づ其の地方の都會即ち政治文明の中心とも云ふべき處に道を傳ふるは保羅の方針となせし處にしてエペソ、コリント、アゼンを動し百尺竿頭一歩を進めて天下の大都會なる羅馬に傳道するは彼の日夕夢想したる處なりしなり。然るにここに又保羅は一の方針を有せり。即ち他人の据ゑたる基石の上に建てず、他人の未だ開拓せざる土地を開拓するは彼が特別に授かりたる使命なりと信じたり(羅馬書十五〇二十)。然して羅馬の都は未だ何人も傳道に着手せざる處なれば、時機來らば全力を用ひてここに教を宣へ大都の教會に恥ぢざる教會を建設せんことは彼の素志にかなひし事なりしなり。然るにここに豫想せざる事は起り來りぬ。羅馬は天下の大都にして諸方の人の集ひ來る處なれば、他處にて基督教を信ぜし人は此の地に流れ來り、いつしか一個の教會を組織することとなりしと見ゆ。これ保羅に取りては意外の事にして、他人の基礎を据ゑし處には行かざる彼の方針より云へば最早羅馬に行く必要はなくなりしなり。然れどもこの重大なる中心に教會が偶然にして始められ、指導するものなくして生長するにまかすは保羅のなし得る處ならず。即ち彼の二の方針ともに之を貫くことは望み難きこととなれり。大抵の人なれば輕重を比較して、直に一を捨て他を取るの外なからん。然るに保羅の偉大なる性格はここに發揮せられたり。彼は二の方針のいづれをも犧牲にせざる爲に一の活路を見出だしたり。彼は更に戰線を擴張して歐洲の

西の果てなるスペインにまでも傳道せんことを計畫せり(羅馬書十五〇二十四)。然して羅馬に行くは羅馬に行く爲に行くにあらず、スペインに行く途中に羅馬を經過するなり是の如くして彼は羅馬の信者より不必要なる疑を挾まることを免かれ、且つ羅馬の信者にも保羅とともに盡すべき事業あることを知らしめ得べし。この精神を明にせんが爲に彼は先づ羅馬書を認めて他日ローマを訪ふ爲の用意をなしたり。亦以て保羅が主義方針に忠實にして且又人情を解し才智と同情に富みしを見るべし。瑣少なる故障の爲に容易に主義を曲げ、更に苦心工夫を用ひざる人保羅に對して何の面目ある。然れども保羅の計畫したる如く事は實行されしや。否保羅の畫策は一層賢き神の畫策によりて訂正せられたり。夫れ保羅の畫策妙ならざるにあらず、然れどもローマの傳道は路の序になし得るにはあまりに重大なりき。コリントに一年六ヶ月の餘を費やし、エペソに三年を費せしほどなれば、ましてローマの都に於てをや。最も多くの年月を用ひざるべからざる地なりしなり。神はスペインに行く途中の人として保羅をローマに導かず、縲絏の身となしてローマに入らしめぬ。これは保羅自らも豫想し得ざりし所にして、不思議なるは神の攝理なり。之によりて彼は自己の主義に忠にして、人の疑念を受くることを免れ、且つ落着きてローマに留るを得たり。今日より見れば保羅の原案にまさりて神の修正案こそ賢なりける。之より先き保羅がエペソに傳道せんとして其の時は目的を果たさず、却て歐羅巴の中に傳道することとなりしも相似たり。我等は已の主義に忠實にして之を守らんために及ぶ限りの才智工夫を用ふれば、神必ず我等の足らざる所を補はん。「我等の求むる所思ふ所よりもいたく勝れる事を爲すを得せしめん。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

德富健次郎先生を訪ふ

十一月二十三日、櫻喬兄に誘はれて東京府下荏原郡千歲村字粕谷に德富先生を訪問しました。恰も新嘗祭日ですから、多分勞働を休んで居られるかも知れぬ、もしや休んで居られずとも、鍬を手にせる先生を訪うて畦畔に短きお話を承るも亦た一興と存じまして、午前九時半、內藤新宿で電車を下り、之れより甲州街道を西へ眞直に徒步すること凡そ二里半、試みに路傍の物賣る小店で「粕谷はまだですか」と尋ねますと、二十歲ばかりの美しい婦人に「德富さんではありませんか、德富さんなら此の橫道を御入りになると直ですよ」、と愛相よく敎へられ、やがて再び或る農家の主婦さんに「德富さんは」は尋ねますと、「德富さんはあんこの植木屋さんですよ」と敎へられました。

　柏の落葉に埋れた小徑に傍うて十坪足らずの茅屋が冬の眞晝の日光を浴びて西向に淋しく立つて、之を遶つて二三十畝の前栽に種々の植木が育てられて居る。雨戶は殘らず閉ぢて、入口に「德富健次郎」と「巡禮紀行」の表紙にあると同じ筆蹟で認めた表札と、之に並んで罫紙に「玉川行、夕刻皈る。二十三日、德富」と認めたのを貼付けた郵便受箱が掲げられて、「緣の前には愛らしい小犬小猫とがおとなしく留守番をして居りました。

　緣先の自然石の沓脫ぎに山桐の書生下駄の古いのが脫ぎ捨てゝあるのを見て、「何といふ穢い下駄でせう」と笑ひますと、「嬉しいではありませんか。僕は紀念に貰つて行きます、」と、櫻喬兄は我下駄と取換へて、名刺に其由を認めてソッと郵便受函へ投入れて、其日は犬と猫とに別を告げて皈りました。恐ろしく北風の狂ふ日で、武藏野は處々の杉林を掠めて木葉が雪やうに降る日でした。

　十一月二十九日、櫻喬兄は生憎差閊かあつて、兵働、大坪の兩兄と共に再び先生を訪問しました。今日は前回とは反對に、風も輕く日の暖い小春日和、加之日曜日ですから先生も必ず御都合が可からうと、急き侯君

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にこれは早や先生の御住居にて候ふ。時は正に午前十一時。

ちゝ、みこ、みたまの大御神子に、
常盤も柏葉も榮光あれ。榮光あれ。

恰も祈禱の終つたときと思しく、しんみりと微かに讃美歌の聲が家の内に聞えました。

『東京から參りました、お話を承りたいと存じますが、今日は御都合は如何でございませう。』と申しますと、先生が障子を開けて、『お上りなさい。その乳母車の中に坐蒲團がありますから取つて下さい。』私共は遠慮なくチャブ台と長火鉢との傍に座り込んで、さて聞き及んだ先生の風彩如何と見るに、イガグリの頭髮が一寸も伸びて、鬚髯は寫眞で見た通り。太い二重瞼に黑い色眼鏡をかけ、木綿絣の筒袖羽織。

『先生、今日はお忙かしくはありませんか。』『今日は差閊があります。』無愛想な挨拶に、『それでは又後日に。』『イエまだ一時間位は宜いでせう』と柱時計を見られる。『落花生の燒いたのかあつたでせう。』『ハイ』と、女兒を背負つた夫人が次の間から茶を運んで下さる。先生は唯自作の落花生を土に荒れた肥えた掌で食べ給ふのみ、一向話が始まらぬ。

兵働兄曰く、『先日栗原君がお訪ねしましたときのお話に、人間の眞活動は神より出づるものか男女の關係から出づるものか迷つて居られるとの御說でしたさうですが、』

先生曰く、『そんなとは申さなかつたと思ひますが。しかし或はそんなことも申したかも知れません。私——誰しもさうですが、私は必しもすべての場合に同じ意見を抱くとは限りません。時と場合に依つて思ふことも言ふことも多少變るのか當然だと思ひます。人殊に日本人は兎角一種の主義とか職業とかを以て個人を拘束する癖があるもので、例へば安部磯雄君が早稻田大學の運動部長だといふので直に彼を一廉の運動家と認めるとか、或は木下尙江君か社會主義者であるとかあつたとか云ふので、其言行か悉く社會主義であると解釋する。人間は爾ういふ器械的のものでせうか。否

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

爾らいふ器械的の人間もありませうが。それが果して人間として眞に價値あるものでせうか。私は歴史上の人物としてはアブラハム、リンカンを最も好むのですが、固より彼の主義を好むものでもなく、又彼の事業を好むのでもない、たゞ何となく何處となく彼が好ましいのです。彼が肖像を御覧なさい、其容貌は常に一種の悲哀を堪へて居るでせう。アブラハム、リンカン、一言にして評すれば彼は實に悲哀の人であつた。天性純潔にして正直なる彼は若くして既に一たび失戀の深き傷を負うた。しかし彼の悲哀は啻に之に止まるのてはない。彼には更に偉大なる悲哀があつた。即ち人類の罪――勿論最も廣く深き意味に於ける罪を悲しむ所の社會的悲哀とも謂ふべき悲哀に彼は満ちて居た。彼が生涯に於ける大小の言行は悉く此の悲哀の發現たるやうに思はれる。彼が如何に悲哀の人眞面目の人てあつたかは、彼が非常なる滑稽家であつたのを見ても分る。――悲哀者に取つては滑稽は一の安全瓣てある――リンカンが學校に居た頃、書取の試験に或る學生が或る難字に出遭つて、誤りませぬかと潛かにリンカンの顔を見ると、リンカンは眞面目に我片目を指さして居た。片目は即ちeyeて、學生は容易に我が難字の綴の中にIの字を綴落したことに氣がついた。又彼が某州の知事になつたとき彼は其の歡迎會に臨んだ。リンカンは非常に身長高く、夫人は低かつたので、彼は人々に挨拶して、其冒頭に「最長と最短」云々と云つたので、忽ち満場の喝采を博したといふ。私などか學生時代に試驗場で隣席の學生に問題の解案を問はれなとすると、例の正義本位の性癖から容易に快く之に應ずることが出來なかつた、而して自ら之を誇つて居たが、一たびリンカンを深く愛するに至つて大に前日の過を覺るに至つた、正義は固より正義であるが、徒らに正義に拘泥して人情の自然を損ふが如きは小人の道德である。リンカンは固より偉大なる正義の人てあつたけれども、彼の正義は正義の正義はなくして、自然の人情が自然に發動する所の正義であつた。即ち彼は自然の人、人情の人てあつた。余がリンカン

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を殊に愛好する所以のものは主として此處にあるのである。トルストイに就いても其通り、余は必しも彼の言論や行動に對し、又普通の意味に於ける彼の人格に對して敬服するものではなく、余が彼に及び難しとする所は彼が不用意無意識の間に彼が人格の根底を横流する所の一團の地氣である救世軍のブースは更に地氣に富める人、彼は實に地から生えだ人である。我が西郷南洲、彼も亦地氣の人であつた、彼は利害よりも寧ろ意氣に隨つて動き、正理よりも寧ろ人情に依つて動くの人であつた。さればこそ彼は月照と情死を企て、麑城の青年と情死した。彼が生涯は即ち情死の生涯であつて、之を利害曲直の眼より見れば最も迂愚なる生涯であつた。しかし歴史的悲劇として彼が如き生涯は最も精彩に富む。吉田松蔭、彼も亦悲劇的生涯の人であつた。しかし彼が人物を以てして彼が如き悲劇的生涯を終らしめず、借すに平人の齡を以てしたならばとも思はれる。」

　此處で話が杜切れて、私が『長井金風先生のお話では、「論語」の孔子の言行には隨分洒落や滑稽の分子が多いとのことです。』と申しますと、『さうでせう、「聖書」にも恐らく滑稽も洒落もあるのでせう。』

『或る意見とか觀察とかを文章に書表はして後よりは書表はさずに胸に畜へて居る間の方が、何となく心中に含蓄があつて心地が良うございます。』『それも其筈でせう、現代の人は殊に餘り多く語るやうですが、それだけ實行の方が貧しいやうです。中學時代の學生の文章などに近頃は驚く程上達して、其思ふ所を餘程巧みに書表はし得るのは喜ばしいですが。どれもこれも餘り巧みに書いてあるので漸次厭氣を感ずる程です。』

　何時も聽者から話の緒を巧みに操らなければ容易に話されぬと聞いて心配して居ましたが、今日は又何としたものか頻りに話に油が乘つて、早くも柱時計は十二時を打ちました。

『餘り良くは出來て居ませんが、自ら耕した結果と思へば亦一種の味がありますよ。』と勸められて三人は遠

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

慮なく落花生を食べて、さて辭して歸る。
『先日は良い下駄を置いて行つて下さつて有がたう。あの下駄は緒か弛んで居て嘸穿き悪いてせう。此次には伽羅の下駄でも備へて居きませう、』と先生は快活に見送られる。

今日は先生夫婦がお留守番と見えて、例の小犬と小猫とは何處へ出掛けたか、一向姿を見せませんでした。（井鼃節　三）

小説　不滅

後藤淺香

（一）

美知子は道下の岩間から噴き出る泉の側で頻りに何か洗つてゐると、いつもの優しい聲で
「美ちやん何かしてゐるの?」
「お竹の下駄を洗つてゝよ。」
「まあお前、竹のものなんど洗つて遣らなくとも。」
須磨子は半ば驚いた樣子である。
美知子はお下げに結んだ赤いリボンを清水に映して冷たい水につかつてゐる、身を切る樣な木枯が吹く。
「だつて阿母樣。」と止める樣子もない。母は少し聲高く
「それ御覽。袂を濕らして。早くお止しよ、お風邪でも引いたらどうします。兄さんは居ないしそれこそ阿母樣まで病氣になりますよ。」
何だか大人にでも話す樣に云ふ。美知子は得意な顏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をして活然として眼を張見つた。

「あのねえ阿母様、吉岡先生は自分の出來る事なら何でもする人が偉いんだつて仰有つてよ。」

「さう。それぢや又ね、暖い日によく洗つてお遣り。今日は早く歸つてね。」

追ひ立てられて、下女の下駄を提けながら歸つて行く。

美知子は追へ歳七つであるが一體に骨細い、纖弱い質なのでどうしても五歳か六歳の樣にしか見えぬ。母と下女と大きな家に三人暮してゐる。若こんな罪の無い、可愛い、快活な美知子を此家庭から取り去るならば恐く母は死ぬだらう。美知子家庭の生命であつた悅の泉であつた。

「美ちやんは何ぞ一番お好き?」

「私ねえ、日曜學校よ」

「何故」

「だつて吉岡先生が居るから」

誰から何時問はれても屹此通りに答へる。美知子にはあの優しい、親切な吉岡先生がまるで神樣のやうに思はれて、吉岡先生の云ふ事ならどんな事でも信じてゐる。暑い夏も、寒い冬も、風の日も、雨の日も日曜學校を休んだ事は無かつた。

近頃はクリスマス前で歌や話のお稽古がある。既すつかり覺えてゐる。どこが面白いのか意味は少しも分らないだらうに、いつでも節面白く歌つて出かける。

あはれやさしき小女子が
　汲める泉の湧きいて、
流るゝ水の色すめば
　サタンの影は映らずて
神の聖顔の影とまり
　世の寒風に凍らずて
渾々たりなその流れ、
　流れに添える街の道
此世の水はよどむとも
　神の泉はよどみなく
行くてに立てる霜柱
　踏みわけ來る小女あり。

美知子は自分が歌中の主人公であらうとは夢にも知らないのである。

（二）

待ちに待つたクリスマスも終つた

十二月二十六日。中學校は昨日から休職である筈に、長男の芳春はまだ歸つて來ない。母は心配で堪らぬ。今朝から食事も進まないでお膳に向けば涙をためて居る。お竹はそれと察すれど、罪のない美知子には不思議に思はれて「阿母樣どうして？」と尋ねる。母は故意と笑にまぎらして「どうもしないの、美ちやんは善い子ねえ、お正月には何を買つてあやげうか。」

「あのねえ、羽子板も、鞠と、お人形と、それだけよ……いゝえ、まだ……あの——阿母樣なんてえね？こんな小ちやい紙があるでせう」

「小ちやい紙つて何？」

「緣ん所にヒカ〳〵するものがついてるのよ。お隣の姉ちやん達がお正月に他所い持つて行くでせう？あれよ。」

お竹は思ひついて

「お孃樣分りました、名刺で御座いませう。」

母は覺えず噴飯した。

「然う〳〵。あの金緣の名刺だらう。可笑な子だねえ。」

「えゝさうよ。名刺てえの」

しんとして居た食卓が美知子のお蔭で少し賑かになつた。

「兄さんは今晩お土産を澤山持つて歸るんでせう？」

母は再沈欝でしまつた。

「如何だらうねえ。たつた五里許りの所を。昨日も歸らないで。今晩は歸りさうなものねえ。困つた兄ちやん。」

「ほんとにねえ、困つた兄ちやん。」

幼な心にもしみたのか鸚鵡返しに云ひながら、母の泣き顔を見て涙ぐむ。

實に親不孝な者だ。先祖にも相すまぬ。歷々としたあの系圖には何の申譯がされやうか。どうしても之が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吉田英夫の一子と云へやうか。芳春、彼は親の苦心も忘れ先祖も忘れて、墮落の淵に沈んでゐる。

三十五年前……さうだ、明治七年の春住み馴れし城下を去つて、此田舍に家を起したのであつた。道德心の低い、風俗の惡い此土地に、始めて家を持つたのであつた。

が間もなく區長に撰ばれて幾年、其後村長と云ふ名前に變つても引き續いて、園田村の義人とし、君子として、其德に懷かれてゐる。吉田英夫と云へば實に誰知らぬ者も無い評判者、近村にまで響いた德望家であつた、十五年前に始めて桑を取り寄せて、先自分の畑に植付けた。

「此立派な畑に桑を植ゑるとは、何たる心得ちがひであらうかと村民は笑つてゐた」翌年は一戶に千本づゝ與いて植ゑさせる。種紙もやる。飼ひ方も敎へる。「いやらしい蟲」と嫌つても一々話をしてゐたが、既それは昔話となつた。今は四百戶の村に、毎年取入れる繭の金が、五萬圓以上である。又どの家にも茶の樹で出來た生垣があつて、之から收れる茶でも何千斤と云ふのである。這麼風に何から何まで氣をつけて、公共の爲に盡力した。芳春が十二歲美知子が二歲の時であつた、父英夫は腦病に罹つて、永遠に歸らぬ人と成つてしまつた。丁度此村に新田を作ると云ふ計畫をした其金も自分の財產を全部抵當にして借入れるのであつた。事業半ばにして此人を亡へる村民の落膽は一方でなかつた。「もう斯う成つては何でも彼でも思を通して新田を開墾いて、此村を榮えさせねば、死んだ村長樣に申譯が無い。」と村民も熱心に働いた。今は山の腹も高い野も、立派な稻田に變つてゐる。山程の借金と、二人の子供とを抱へて立つた三十三歲の須磨子が、甚麼辛苦を嘗めたか、甚麼働をしたかは、其窶れた面貌に現はれてゐる。

（三）

十二月二十八日愈年末に迫つて子供は正月を待つのみであるが、夫々一家の世話をするものは、氣が引きしまつて誰にも落ち着かぬ、物騷しい樣子がある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

須磨子は今借金の後始末に當惑してゐる矢先へ復々心配が加つた。美知子は一昨日かひ少し熱が出て、ほんの風邪と思つたのが、漸次樣子が悪くなる、今日はもう朝から四十度の熱が下らない。醫者は眉を顰めて「之は急性の肺炎である、此熱が明　日中に下らねば萬一の事が起らないとも限らぬ」と云つて歸られた。

心細い。女一人の手で年末の始末は如何なるてあらう。誰でも宜い、這麼時にたつた一人でも心から同情を注いて呉れる人が有つたならば、どの位心丈夫であらうか。昨日も一昨日も借金も催促が來る。考ふれば、あの金は公共事業の爲では無いか。決して其報を求めるのではないが、今此村が這麼に富み榮えたのも全く亡き良人の力であらう。存命中にはあんなに吉田樣々々と朝も晩も客の絶え間無つたものが、這麼に成り果てて今は、誰一人見向きもしない。「落ちぶれて袖に涙のかゝる時、人の心の奥ぞ知らるゝ。」まアよく云つたものだ。仕方がない、之も人を怨んではならぬ、自分が徳の足りない爲であらう。それにしても、あの芳春は何と云ふ不幸者であらうか。子供の時からよく出來る。怜悧な子と譽められて「矢張親の子だ」と誰云はぬものも無かつたのに、既休業になつて三日にも成る。今頃何處に遊んでゐるのだらう。復悪い友達に欺されて酒に醉はされ、女に迷はされてゐるのであらうか如何して母の心が解らないのだらう。此子が大きく成るまでと、あれ程に苦心して育てた親心も知らないて。考へれば考へる程、憎らしい樣になる。若い女一人で此家を子供に持ち續ける事が六ケしいから、是非養子を貰へと親類にすゝめられても、只此子供の可愛さに、他人の親の手にかけて、心配させたく無いと思ふ許りで、親族と仲違ひしてまで斷つて、心細い、淋しい、頼ない思をして、幾年の間人知れぬ涙を飲んで暮したのでは無いか。芳春よ亡き親も一人の母も忘れて放蕩に身を持崩してゐるのだ。彼地からも此地からも、飲食店や料理屋の婀娜しい書付が來る。不幸者奴！。武士の血は消えたのか。!!

須磨子は這麼事を考へ乍らスヤ／＼と眠つた樣にし

て、仰むきになつた美知子を冷やしてゐる。額と胸に載せた氷嚢から煙の樣な蒸氣が立つ。

漸次樣子が悪くなる。醫者に使を走らせる。近所の人を呼ぶ。親類からも見舞が來る。併し眞の賴になる人は一人も無い。醫士の注意で芳春にも使をやつた。日は暮れる。近所の人も一人減り、二人減る。田舍の冬は格別に淋しい。雨戸打つ落葉の音。幽なる流の響。

隙間もる風は身を切る樣だ。今夜も霜夜であらう。

（四）

神は何故に此少女を苦しめ給ふのであらうか?

病は益々重い。三十日。まだ今日も快方の見込つかぬ。苦しいのであらう、時々重々しい樣に眼をあける最愛の母を見ては安神した樣に復眠る。美しい、輝く樣な、可愛らしい顔に、何處となく神々しい所が見える。未だ世の風に觸れぬ蕾の少女が何の爲に這麽病魔に捕はれたのであらうか。神は此まゝ天國に召し給ふのであらうか。餘りに早い。餘りに惜しい。美知子は母の生命である。

神は蕾と共に枝をも手折り給ふのであらうか?

須磨子は終日終夜枕許に附いて、看護してゐる。驗温器を見れば三十九度、四十度、四十度五分……いつも這麽である。確に燃える樣な熱であるのに、此驗温器が狂つては居ないかと疑つて見る。

「奥樣。吉岡先生がお見えになりました。」下女が嬉しさうに云ふ。

「オヤ、先生が、早く此方に」

言ひかけて出向ひに行つた。

「美ちやんは如何て居有います?」

挨拶もせず、心配な樣子である。

「未だ少しも快い方に向きませんので……まア兎も角、さア御上り下さいまし。よくこそいらつしして下さいました。美知が甚麽にか悦びませう。」

吉岡は恐ろしいものでも見る樣に、動悸を打せて病室に入る。涙に咽んで暫しはものも言ひ兼ねてゐたが漸く

「美ちやんー」

涙を拭いて、美知子に故意と笑顔を見せやうとする。

「先生。」

涼しい眼を見上げた。何も云はなかつた。が神様の様な、優しい、懐かしい先生、「誰よりも好き」と云つた先生。もう一口も云はないでも十分に意味は通じてゐる。吉岡は側によつて美知子の手を握つた。視線は固く結ばれてゐる。今は先生でも生徒でもない、神の愛し給ふ二人の姉妹が聖前に跪いて居るのである。輕く眼る閉ぢて

「天に在します神様！聖旨に叶ひますならば、何卒美ちやんの病をお癒し下さへまし。此足らざる祈をエス様を通してお願ひ申しますアーメン」

「アーメン」と美知子も續けぬ。

大洋に漂ふ棄小舟が、何處かの陸にたどり着いた様に、暖い神の懐に抱かれて心から安神したのであらう。復スヤ／＼と眠つてしまつた。

須磨子は先刻から涙に咽んでゐたが

「先生！有り難う存じます。美知が甚麼にか安神しましたでせう。昨日から熱に浮されては先生の事を申しまして……昨日も『阿母様、吉岡先生が天の使と一緒にいらつしてよ』なんて申してゐました。」

「まア那様で御座いましたか、ほんとに私共の及ばない様な、立派な信仰を持つてゐらつしやいます。私は今日こそ聞きまして。早く知ればよございました事に。」二以は話ながらも絶えず手を撫でる、足をさする

相變らず熱い様な熱である。

暫くしてゐる内に少し眼をあけて「阿母様。先生。」

二人とも居ると確めて

阿母様、クリスマス　叔母様から頂いた菫の簪が有るでせう？」

「有りますとも、早く癒くなつてね」

母の言葉を遮る様にして

「あれをねえ、先生に呈て頂戴。」

「何故？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「先生の床飾にしてある菫がだめに成つたんですつて」
少し振り向いて
「ねえ先生。」
須磨子も我子乍ら「這麼美しい心の子供が有らうか利口すぎる」と思つた。
美知子は自分の手に取つて吉岡に渡す。強いて拒むも反つて病人の心を痛めるからと思つて
「まア奇麗な事ね、どうも有り難う。」
美知子も悦んで「先生、好くつて？」
「え丶、本當に好いのねえ、早く癒くなつて遊びにいらつしやいっ 先生が床の間に飾つときますよ。」
「嬉しいのねえ、お正月にてせう？ 先生受くるより與ふるは福なりてえんてせう？」
「え丶、よく覺えてゐますねえ、美ちやんは福よ」
美知子は言葉づかひも確乎して全然て病人とは思はれぬ位。て這麼様子ならもう心配は無いと思ふ樣てあつた。が復燃える樣な熱、四十度以上になつた。現か夢か、苦しさうに「兄さん、兄さん」と呼んだ。須磨子はもう堪り兼ねて泣き臥した。吉岡も泣く。下女も泣く。其いぢらしさ。父の顔も知らぬ美知子には親とも頼む兄ては無いか、情け者、不孝者とは知りつ丶も血を別けた兄が懷かしうあるまい事だ。去年まで母の側て一緒に暮した只一人の兄である　戀しい、懷かしい、會ひたいのは無理てない。
何をして居るのてあらう。先祖も親も振り棄て丶尙此罪も無い可愛い妹も棄てる氣てあらうか。
頓て聞き馴れた足音。歸つた。屹度さうだらう。一座は耳を欹てる。下女が急ぎ足に出て行く。
「まア芳樣！」
すぐ後戻つて
「奥樣。芳樣がお歸りなさいました」
と周章て云ふ。
須磨子は泣きはれた眼を抑へて表へ出る。親の心は闇に有らねども子を思ふ道に迷ふとか憎らしいと云ふも可愛さの餘りてある走り。着いて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「よく歸つた。早く美知にお會ひなさい。もう待ち兼ねてゐた」
親の情とはどこまで深いものであらうか、あれ程の罪は一口も責めないで「よく歸つた」とは。產みの親だ。
優しい母の言葉は叱られるよりも苦しい。芳春は只面目無げに「ハイ」と云つた儘病室に入る。
「美知よ！美ちやんよ！」
男ながらに其聲が潤んでゐる。美知子は聞き馴れた聲に眼を覺まして
「兄さん。歸つて。」
只嬉し淚に咽ぶ。芳春も淚ぐむ。
「美ちやん！どこが苦しいか？直に快くなれや。」
「えゝ。兄さん！如何して遲かつたの？阿母樣が每日泣いてゐらつしてよ。さうして兄さんは惰けて勉强しないんだつて仰有つてよ。」苦しさうに
「兄さん！さうぢや無くつて？」
敎師の敎訓も、母の戒も常に馬耳東風であつた。併し幼い妹の口から眞心こめて斯く言はれては胸も張り裂ける樣。其儘立ち上つて二階に上る。簞笥を開ける音がした。怪しいと思つて須磨子は走つて行く。
間一髮！吉田家累代の寶物、國光の短刀は鞘を離れて居る。芳春は兩肌脫いて坐つてゐる。走り付いて短刀を捥ぎとる。
「何事です！」
「濟みません。阿母樣。死なせて下さい。武士の子てす。」
「芳春。よく云つて吳れた。武士の子か。今お前の汚れた精神を殺しなさい。宜しい。皆許す。人の爲に働いて斃れた阿父樣の血があるなら、末長い殘の生涯を人の爲に獻げなさい。」
聲い凜えて居る。
「阿母樣。許して下さいますか………」
無言！　漸く言葉をついて
「解りました。今迄の芳春は切腹して斷しい芳春が生れました。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

共に泣く、共に悦ぶ。親子手に手を取つて段を下る。

病は益重る。醫士は二人まで來てゐるがどちらも首を傾ける。近隣の者、牧師、教會員なども集つてゐる。芳春は姉を抱きしめて

「美ちやん、美知よ、美知よ。兄さんは之から乾度よく勉强して、阿母樣を悦ばすぞ。美知よ。兄さんが惡かつた。許して吳れろ……」

幽かな息を吐いて

「兄さん！勉强するの、嬉しいのね」

限なき悅の色を見せて、もう何も心殘りは無いと思つた樣に、眼を閉ぢた。

「美ちやん、美ちやん！美ちやん。」

「……」

「美知よ—。美知よ—。」

呼べども答へず。今美知子は微笑みたる亡軀を遺して、天國の人と成つたのてある。

（五）

一粒の麥、もし地に落ちて死ずば唯一にて在ん。もし死ば多くの實を結ぶべし

（約十二〇廿四）

東京高等師範に拔群の成績を表し、今は身を中等教育界に獻じて活動せる一大教育者がある。彼は實に勤勉であり、大膽である。善と知り義と知らば一歩も退かぬ。微笑んで舷頭に立ち、逆まく人生の濤を凌ぐ。彼は名を求めず、利を求めず、只毎日樂しく働いてゐる。

我父神は今に至るまで働き給ふ。我も亦働くなり

（約五〇十七）

現代稀に見る眞誠の教育者芳春。彼は働の實が永遠に不滅である事を信じてゐる。

（完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

クリスマスの夜

ヴヰクトル、ユーゴー

小雪は苦痛の中ながらも流石に女の兒だ。此の人形を見ると共に、桶を持たま丶足を止め、殆ど何も彼も打ち忘れたやうに見惚れた。此の子の目には此の玩具店の美しさが宮殿の樣にもみえ、人形の姿が皇女とも見えるだらう。一日もしも此樣な美しい着物を被たら何うだらう。何時までも此の人形を眺めて居る事が出來たなら、何の樣に嬉しからう。小雪は知らず〲口を開き、細語くやうな聲を洩らして、何か人形に話しかけて居たが、此の時忽ち背後より大喝一聲に「未だグズ〲して居るのか」と叱したのは手鳴田内儀の聲である。

桶を提げたま丶小雪は逃げた。逃て暗の中に入た。此の軍曹旅館は殆ど町の盡れる邊りに在るので、直に小雪の身は水汲みに行く細道に差掛つたが、勿論此には夜店もなく。燈明もない。全く先程の客が云つた通り馬さへも恐れて歩み得ぬ樣な暗さである。其の中を只獨りで深く〲歩いて行く小雪の恐ろしさは何れほどであらう。其の上に夜の寒さに小い手が膨物の樣に凍え、多分は覺へをも失つたゞらうと察せられる。幾度小雪は足を止めたかも知れぬ。足を留めて逃歸らうとしたけれど、其の度に女主人の叱り聲が耳に響くやうに思ひ、迯り又迯つて終に崖下の泉の所に着た。幾度も來慣れて居る道とは云へ、眞暗の中で道を踏み迷はなんだのが不思議である。

漸うして先づ漸く水を吸み上げた。けれども小雪は知らなんだ。汲む爲に俯向いた時に衣嚢の中から麪麭を買ふ爲の彼の十錢銀貨が水中に落ちた。今は全く其の銀貨を渡された事をさへ忘れて居るのだ。ホッと息して水の滿ちた桶を足許に据へ、更に更に立上らうとしたが、最う力が盡きた。重い桶が少しも上らぬ。暫く桶に凭れる樣にして休むで居ると、目の前の闇の中に何か立て居るやうにも感ぜられる。疑心暗鬼と云ふ者だらう。誰とても暗闇に獨り居れば、何だか怪しい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

者が身邊を徘徊する様に思はれて益す恐しさの募る者だ。小雪は確に化物が居るのだと思た。最う猶豫する力はない。桶を提げて逃げた。

恐れは力を生ずるものだ。何うか斯うか桶は小雪の手に隨つて上つた。けれど四五間行く間に水が溢れ、爾なきだに薄着に震へて居る小雪の腰から下を浸したけれど寒いとも云はぬ。云ふ暇さへも心に無いのだ。蹌踉いては歩み、行きては休み、叉幾間をか歩むだが水は次第に減るけれど、重さは益す加はる様に思はれ果は只の一歩も歩み得ぬ事になつた。人間の悲酸の極とは此の事である。曾て神の何たるを思ふた事の無い少い口から知らず〳〵神の御名が洩れて「神さま、神さま、助けて助けて。」吁、是より上の切なる祈禱が世に有らうか。若し人を助くる神あれば今此の小雪を助けねばならぬ。不思議にも神は有つた。願の聲の終ると共に、桶は輕々と提げられた。確に何者か桶の手に手を掛けて居る。小雪と共に提げて居る。其の頑丈な手が小雪の手に觸れた。あゝ神でなく人である。誰か闇の中で分らぬけれど男である。小雪の背後に立ち添うて手を伸ばし水桶を輕々と提げて居るのだ。小雪は恐れ戰く筈て有るのに少しも恐れぬ。恐ろしい様な氣がせぬ。若しや亡き母華子が草場の影から見張つて居て、恐れるに及ばぬ事を知らせるのではなからうか。其れとも蟲が知らせると云ふ者だらうか。小雪の胸には何と無く賴もしい様な心が滿ちた。

小雪の持てる水汲桶に手を添へたは何物だらう。小雪が水を汲むだ後で何だか暗闇の中に化者の佇立んで居る如く感じた其の化物だらうか。其れとも小雪が只た今「神様」とて助けを呼むだ其の神様であらうか。勿論小雪自らも知らぬ。知らぬけれど、唯賴もしい。唯だ有難い。兎も角も助けられたのだ。

小雪は水桶を提げて呉れた其の人の顏を見やうとした。けれども暗の中で能くは見えぬ。其の人も小雪の顏を覗き込むやうにして「イャ此桶は仲々重い此の伯父さんが持つて行つてやらう」と云ふた。顏は見へねど自ら伯父さんと云ふからは可成の老人に違ひない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聲も若い人のやうには聞へぬ。小雪は今まで何人をも「伯父さん」などゝ親げに呼だことはない。けれど此の時ばかりは有難さに思はず爾ら呼むだ。「伯父さん、伯父さん」 老人「おゝお前は幾つだえ」 小雪「八歳です」 老人「八歳で此の樣な桶を持て」 小雪「はい、水を汲みに來たのです」。話は疊みかけるやうに、後から後からと續いて出る。 老人「オヽ水を汲みに、此の山の中へ、シテ何處から」「二十丁程先からです」老人は少し考へて「二十丁も暗の中を、餘程ど無慈悲な母親だと見へる」 小雪「私には阿母はないのです」 老人「ナニ阿母さんがない」「ハイ、皆んな阿母さんが有るのに私には無いのですよ」と云ひ、老人が語を繼がぬ中に「多分初から無いてしやう。見た事が有りませんもの、爾です聞たことも有りません。」

老人は益す深く心を動した容子で、頓て水桶を下に置き、「能く似た身の上もあるものだ」と呟いて、左の手を小雪の頭に、右の手を小雪の顋に掛け、小雪の顔を引起して透し見つゝ「シテ、お前の名は何と云ふ」

此樣にせられても小雪は更らに恐れを感ぜぬ。「ハイ私の名は小雪」。

「エ、エ、エ、小雪！」と老人は叫むだ。眞に跳返る程驚いたらしい。彼は暫くにして又水桶を取り上げて歩みつゝ「オヽ小雪、小雪、小雪と云ふのだな。家は何處」と何げなく問ふた。小雪「家はモントフアメール」 老人「誰が此樣な水を汲ませる」。小雪「手嶋田の内儀さんが」「オヽ手嶋田の内儀さんが、シテ其の家は」「宿屋」「丁度好い、宿屋なら私も泊て貰はう」。小雪は道を案内する如く先に立て歩んだ。

歩みつゝ時々に背後を向き、暗の中にも「伯父さん」の顔を見上るは宛も主人の前に歩む飼犬の樣てある。深い安心と親みが自ら現はれるのだ。

「お前の外に下女はないか」

「有りません、狡子、痣子といふ二人の娘があるばかり」

「其の娘は何をして居る」

「人形や玩具を澤山持て遊て居るの、私し一個も人形

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がないの、小さい鉛の小刀が有る計りなのよ。短い之れぱかしの」とて自分の指を出して示した。
「小刀を翫具にすると危いが」
「鉛だもの切れないワ、蛇の首や何んかは切るけれど」
幼い物語が深く〳〵老人の様に浸み込む容子だ。斯くて二人はモントフアメールの町に入つた。

（涙香氏譯「嘘、に無情」の一節）

汝もし時に或は汝の知れりと人に思はるゝことをば知らさる如き態を伴はり装はんには、以後は汝の知らぬことまで識れり思ひ倣されん。

（ベエコン）

友が宿

堺　いよ

今花陵に日が沈む。
市のみ寺の鐘が鳴る。
霜月暮の風寒し。

梢は痩せぬ、葉か落ちて。
郷里淋し、友失せて。
秋を「フォール」と良く云つた。

御山の櫻が笑つたら、
飛んでお出でよ、都路は
花の錦に人の綾。

病と憂さの襤褸脱いで。
掛けておぢやれよ春衣。
彌生待つ間か物憂やな。』

時の流が淀まずは、
四季の車は憩はじな、
雪か消えたら芽か萌えて、
蕾が蒸して、香がさして、
御山の櫻か笑ふだろ。
でも都路の待人は？
早や花陵に日か消えた。
木枯戰ぐ託麻原。
冷き石の友が宿！
豐頰、清瞳、あて姿、
穎才、洒脱、深情、
花も實もある學び子は、
枯葉ちらした秋風と
一緒に立つた仇嵐
吹いて亡びぬ、とことはに。

筑摩川

猪野隼夫

今年一月、余腦を病みて某の病院にあり。附添ひの看護婦松澤某、年甫めて十八。信州松本の商家の女也。松本女學校に學び三年に及びしが頑固舊弊なる伯父が家督を強ふるを厭ひ、獨立の志を抱いて此病院に來る。曰く、他年一日獨立の女醫とならずは奮つて又故郷の土を踏まじ。其日試みに來つて妾か得意の顏を見給へ、と。其微笑は淋しかりき。余爲に歌つて曰く、

悠々として日本の高原の國の千曲川。
やがての年に獨立の女醫とならずば、
神かけて又と渡らし。渡りなば
誰か強ひ得ん、頑固の伯父か家督を。
獨立の我は女醫なり。その時よ、來ませ、
妾が高慢の得意の顏を見るべきに。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

郭公の生ひ立ち

井篦節三

名高い詩人ゲエテが、エナの市街から程遠からぬ、ザアレ河の邊の某村て、清く晴れ渡つた秋の半頃、食卓を屋外に運はせ、友人のエッケルマンと晝餉を偕にしつゝ、從容として談りつ笑ひつ、四方山の物語に打ち耽つて居りますと、其時突然一羽の小鷹が兩人の傍を掠めて飛び過ぎました。ゲエテは小鷹の形容や飛態が如何にも郭公によく似通つてをるのを見て、

「郭公といふ鳥は夏にばかり郭公で、冬は小鷹に變るといふ話を、少年の頃に聞きましたが、成程よく似て居りますねエ」

と申しますと、エッケルマンは博物學者てすから、郭公に關する樣々の談話をなし、ゲエテは熱心に耳を傾むけて聞きました。

「ナニ、郭公か小鷹に變るといふことは、今日でも一般に信ぜられて居るのです。此れは無論虚說てすが、しかし鳥の中でも郭公のやうに不思議な鳥は又とありません。」

「左樣でせうね。私も郭公の話は隨分澤山耳にしましたが、聞く度每に益々感興を深かうするのは實に此鳥です。ああ、郭公、彼は所謂公然の秘密ですね、而も容易に解き難き秘密ですね。事物の最終と最美とは全べて吾等の前に封鎖されて居ると申しますが、郭公は正にそれですね。」

「全く左樣です。郭公は決して其卵を自分で孵すことをしないのです。即ち卵を知更鳥や巧婦鳥の巣へ產み落して置くのです。凡そ小鳥には蟲食鳥と食穀鳥との二種があるので、郭公は知更鳥や巧婦鳥と同じく蟲食鳥ですから、決して穀食鳥の巢へ卵を產まないのです。所が知更鳥や巧婦鳥は其形式も聲も全く郭公とは似て居りませんのは、同じく蟲食鳥であるといふことを如何して知るのでせうか。實に不思議ではありませんか。

「又、鳥の巣には鳥の種類に依つて、硬いのと柔かいのと、寒いのと暖かいのと、乾いたのと濕つたのとあ

りまして、普通の鳥は巢か適性でないと育ちませんけれども、郭公の雛はドンナ巢でも一向平氣なのです。しかし親鳥は勿論寒さ暖さの區別を知つて居りながら、雛には寒暖か何の關係もないといふ事實をドウしてチャンと辨へて居るのでせうか。是も實に不思議ではありませんか。

『それのみならず、我巢に他鳥の卵を預かつた養母鳥が郭公の雛の卵から孵るのを見て喜ぶことは實に非常なもので、眞の我雛の生れたよりも一層喜ぶので、其喜の餘り一時は眞の我雛のことを全く忘れてしまふのですず。所で、此郭公の雛は普通外れた貪食家で、其上に恐ろしい横着者で、十分成育して自由に飛べる樣になるまで、自身に餌を探さずに一切養母に養つて貰ふのですが、養母は唯々として始終深切に養つてやるのです。

『さて郭公の雛が一旦成人しますと、或る高い梢の木の頂上に飛揚りまして、一聲高く叫ぶのです。それを號報に養父母や義兄弟や、近隣の小鳥が諸方から集つて來る、かの平生は石垣や柴垣の間に蹀躞して居る巧婦鳥までが、此日に限つて高い梢の頂上へ飛揚るのである。そこで養父母は最も心を込めた手料理を以て彼を饗應し、他の小鳥は思ひ〳〵に種々の食物を賚らして、別離の情を惜み、彼の前途を祝するのである。』

『さうでせう、無情の鳥類の間にも人間と同じ愛情か成立つに相違ありませんね。』

『其の又た愛情が非常なものです。例へば人間か郭公の雛の居る巢に近かうものならば、義理ある親鳥が驚怖と憂慮とを以て身を揉んで狼狽して如何にもして彼を庇はうとする其の有樣は實に可憐極まつたものです。殊に僧帽鳥の如きは狂亂の餘痙攣を起して巢から轉び墜ちることさへあるのです。況んや苟も此雛に恩交ある鳥は彼を中心として一團の親族關係を結び、相一致して彼の保護者たるといふに至つては、其義理恩愛の切なること人間すらも到底及び難いではありませんか。然り而して此の切なる義理恩愛に對して彼の郭公たる者は果して何者を以て報ゆるかと申しますと、驚

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くべし、彼は彼等の巢に再び其厄介なる卵を産み去るのであります。』

是に至つてゲエテは深き嘆息を漏して呼びました。

『イヤ、郭公の忘恩非行は固より悪むべきですが、しかし私は此處に却つて神の攝理の忽諸ならざるを見る。

鴉を思ひ見よ。
稼かず、穡らず、
倉をも納屋をも有たず、
されど神は彼等を養ひ給ふ。（路加傳十二章）

神は自然を通じて、他物をして相養はしめ給ふのである。人間豈亦然らさらんやです。』

『私も君の説に賛成です。私か少年の頃のこと、或日一番の巧婦鳥の雛を捕へましたか、ツイ紛失しましたので大に心配して居りますと、ドウでせう、次の日森を散歩して居りますと更知雀の巢に二羽の巢婦鳥の雛が愛らしく養はれて居たてはありませんか。』

之を聞いてゲエテは再び嘆聲を放つて申しました。

『見よ、神は處として座さざる所なく、物として愛し給はれさるはなし。吾等其の證據を既に可憐の動物に於て見る、况んや萬物の靈長たる我等人間に於てをや。然るに世に神を知らず眞の愛を悟らざる者多し。百のモーゼも千の豫言者も彼等には何の意味をなさぬのである。あゝ。』

（エッケルマン）

戸山の原の夕陽

櫻　喬　生

一面廣漠たる武藏野の原、西に淀橋附近の綠樹密林を望み、北に諏訪戸塚あたりの森邊を控へて、翠綠の色濃かに、遙か富士の靈峰をポッカと寫し出して居る戸山の原の光景は、東都の郊野には迚も容易に見ることの出來ない詩趣と美觀とを匂はして居る。

生は西久保の寓居から早稻田の學園に通つて居た時分、厭でも朝夕二回づゝは必ず此の原を通過るのが常であつた。て生と此の原野とは既に三年四年前からの親友なので、狹い小路から被服庫の横手を拔けて此の懷かしい荒野の景色に接する毎に、折もあらば一度は必ず拙き筆に上せて我が沸々の情を寫してみたいものとの希望を抱いて居た。が惜しいかな當時の我筆は此の崇高美妙の叙景と感想とを記すには餘りに浮いて居た。餘りに小さ過ぎて居たのである。今とても此の點に於ては矢張り同樣ではあるが、然し既望十五日の夜、煌々たる明月の下に此の靜寂審美の懷に抱かれては、流石に我慢の紐が繼げなくなつて了つた。元より美しい廣茫とした「戸山の原」の眞詩趣は、到底我が筆端位では現はされさうもない。とは云へ、一度木の下路を歩いて荒野の一角に出ると、自然の美趣は俄然展開して然言の裡にも尚ほ宇宙天地の大を語つて居る。射的場あたりの廣大な土堤、生え茂る綠草、遠くは仄かに淀橋あたりの木立までが見え徹いて、浄水場の赤い高かあい煙突の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

姿などが半空に聳へ立つてる樣は、實にや繪にも及ばぬ美觀を示して居る。

晨の氣澄み渡つて、曙光の翼漸く東天に現はれむとする時分、戸山の原の光景は又一入の寂味と靜美とを現して來る。さうかと思ふと、曠野の一角には既にもう靴音が高く響いてきて銃劍の色がギラ〳〵と閃めく。塵埃が立ち、號令の聲が起る。射的場には今しも銃聲が切りに聞へて居る。騷馬が馳けまわる。小僧や女童達が兵士を的込むで煙草などを賣り歩く。世は未だ殘むの夢路に親むで居る頃よりして、此の原だけは忙しい程の活氣と砂塵とが動いて居る。道行く人は思はず此の一種の魔氣に打たれたかのやうに、勇壯な練兵の狀態に見惚れて時の移るのも知らないと云ふ有樣。淀橋あたりの煙突からは、今しがた一切り黑煙の渦卷が立ち上つて蚖龍昇天の活畫を描き出して居る。刹那に白雲薄れて富士の高峰は確然と其の半身を現はす。一脈の連山は低う四邊を走つて、樹々の綠も一入なつかしう見へる。僕は何だか此の原を通る度毎に、先づ思ひ當るは富士の靈峰である。優に雄々しい富岳の遠景である！

同じ時代の偉人傑士でさへ、我等凡庸の眼には始終明確な陰影を與へないと同樣、此の雄渾にして壯大、崇高にして嚴粛なる富岳の美觀が、なか〳〵以てお安くないのだ。夫も其の筈、我等は朝夕起居を共にし寢食を同うして居る父母兄妹に對してすら、平素之と云つて特別に著しい有難味も感知せないのであるが、一度異鄉の山河に起き臥して、慣れぬ人情風俗の巷に投入してみると、卑怯ながらも我れ知らず望鄉懷古の淚がはふり落つる。雲に隱れ、霞の帳幕に入り、西方遙かに其が靈姿を雲中深く潛めて居る富士の靈峰は、能く此の人間通有の弱點を見拔いて居るものと見へる。さればこそ暫らく半身を現はしても何だか斯う現世の罪劫を見るに得耐へぬと云はぬばかりに、直ぐさま朦々たる白雲審美の裡に其が妙に奇しき本體を包むで終ふ。然れども流石に天は高く氣は澄み渡る小春日の空、人間感情の琴線までが何時しか一種靜寂の氣を含むで、神の御聲の天

地宇宙に滿ち〳〵る秋の夕——わけても美しい血潮のやうに夕陽が今しも西山樹影に隱れやうと云ふ——時分になると現世の淸らなる空氣が富岳の靈に感應したものでもあらうか、一點穢れなき崇高極美の姿は我等の眼前近く出現するのである。夏の夕、の春宵、雪降る日、月すむ夜半、何れも取り〳〵に貴い懷かしい印象を與へて居るが、僕は格別すみ渡る秋の夕暮、今し西山靜寂の帳幕に入らむとする富岳の姿を最も美しう幽雅しきものとして賞觀するのである。げにや戸山の原は富士の靈峰を得て始めて崇高偉大の自然美を發現するものと云はねばならぬ。

(二)

去年九月の末つ方、山吹の里に近い面影橋畔の小家に假寓して居る時分であつた。朝來降り續いた雨が、日暮に近い頃キッパリ晴れて西には置きあまる樹々の梢の玉露を、美しい繪のやうな夕陽の色がさし添へて、何だか一入だ地の澄み渡るやうな感味を與へて居る。

一日鬱陶しさを忍びて室內に閉ぢ籠つて居た僕は、何だか斯う新鮮潑溂とした郊野の景色が懷かしう慕はれてならぬ。夕陽は今し寺院の一隅、高い銀杏の梢と水平線になつて、所々には既に美しい晴たやかな靑雲が流れ渡つて居る。

耐へ兼ねた僕は、ステッキ片手に戸山の新街道を拔けて曠野の一角に出ると、雨後の景色は又一倍と懷かしい。日は既に西山夕の森に沈むで、四邊には薄い紅紫の雲が宛然に自然の大刷毛でも流したかのやう。一帶の雲影は柔い簇々とした、接觸らば消べてもしやうといふ有樣で、所々には黑暗色の塊が巍然として横つて居るもしや此等一帶の西雲を大海波濤の餘勢と見たらば、一團の黑雲巍然として突き立つて居るのは、さしあたり海波の洗禮に淨き泡沫を散して居る岩礁の形とも見るべきであらう。西南の一隅より北東の一端にかけては、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

脈絡たる鶯色の雲が鮮明な色をみせて廣い大きな長橋を畫して居る。富士の雄姿は心地よささうに緑り涼しき面容を現はして靑雲遙に突き立つて居る。おゝ此の美觀――鶯色の雲、雨後の夕陽、西山審美の雲影――僕は此の時ほど心からなる詩趣の重みを感じたことはない。否、此の時程深き哀情の平和と淸爽神美の感想とを經驗したことはなかつたのである。

刹那に僕は「我」といふ小さな城壁を脱却してしまつて、暫しは此の神靈極美の光景に夢現となつて一意、西なる空を見凝めて居ると、美しい目も彩なる棊雲の形は除々と動き出した。怒濤の裡、岩樵の屹然として白沫を散らして居ると見た黒暗の密雲は、既に少からず形體の變化を示して居る。然かも鶯色の靈彩は層ほも栽然として靡き渡つて居る。所々には星の光が薄く輝いてきた。股引半天姿の人夫が一人二人遠く我が眼前をかすめて行く。やがて夕の色は夜の帳幕の裡に合體して遙か大久保あたりの樹影よりは、懷かしい豆のやうな燈火の點々たるのが目に付いてきた。目白臺の晩鐘が意味ありげに長あく細く波打つてくる。僕は此の刹那、何とも彼とも云ひやうのない崇高淸美の感に打たれて　思はず首を垂れ心からなる感謝と隨喜の祈禱を捧げた。月は中空に澄むで居る。眼前には天使かと見る陰影が切りにちらついて來る。おゝ郊外の雨後戸山の原の夕景色、生は恐らく我が生涯を通して此の刹那の感味を忘却することは出來ないであらう。

〔三〕

慥か、三十九年の霜月半頃かと覺へて居る。生が未た早稻田の學園に通つて居る時分、一日坪内博士のシエークスピヤの講義を聽いて、熟々ハムレット公子の面影やオフエリヤ姫の優に優しき心情などを思ひ續けて、夢中に八幡の森を拔け、足は何時しか戸山の原を踏むで居るのであつた。刹那に澄みきつた寒い空氣が犇々と膚に迫つて來る。冷たい朔風が遠慮もなく横面を擲る。「おゝ寒い……」思はず僕は身を震はして外套の襟

に頰を摺り付けた。

と見れば一面の郊野は薄雲濛々として、大久保あたりの樹影生々と靑み切つて居る所、淀橋あたりの煙突は朦朧として立ち上る煙の末も宛然に夢のやう。深紅な血潮のやうな夕陽の影は今し靜々と富岳の一端を降りて行く。おゝ其が滴るばかりの紅、鮮明適確の圓球、手に取つて郊野の芝生にでも轉がしてみたいやうな感じもした。が、見るまに球はズン〳〵と地平線へと下りてくる。其の移動する歩みの速度があり〳〵と見れる。西雲は一面に眩ぎばかり黃金色の色彩に輝いて赤紅の中に著しく黃味を帶びて居る。何だか繪にも書ひて見たい程崇嚴な壯重な光景である。曠野は一面に深々とした靜寂の氣に滿ち〳〵て居る。此の瞬時又もやヒヤリと澄みきつた大氣が全身を浴びせかけるやうに思はれて胸の淸爽は例へつべくも見へぬ。と見れば初冬の夕陽は富士の彼方に落ちて、吐き出す光彩の美しさ。黃金橙色、薄紅紫色、赫炳たる五光の色は深く天地を包むで偉人の入滅の如何にも靈妙不可思議なるかを示して居る。道行く男女も、思はず足を止めて恍惚と見入つて居る。日は暮れて空には星が閃めく。おゝ此の景色、此處ならでは……と切りに胸の淸爽を感ずるにつけても、何だか見ず聞えぬ絕大者に對する感恩憧憬の衷情が只何の理由もなく湧き起るのであつた。斯くて僕は默想多感の裡に、栗の葉落つる里の細路を拔けて懷かしい大久保の我が家へと辿り着いたのである。

〔三〕

僕は今降りかゝる危急の事務に追はれて、今日も亦例の問題の爲め重大な使命を果すべく小石川なる柳町へと足を運び入れるのである。

早稻田の寂びしい新街道を拔けて江戸川近くへ來ると、夏の日はもうとつぷりと暮れて、涼しい一陣の夕風が心地よく我が袖の端を掃つて來た。月は砲兵工廠の彼方、薄黑い雲間に其の一部を現はして居る。橋畔には欄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

干に倚つて天空を見守つて居るものが多い。聞けば今宵こそは中秋の滿月ださうな。七月既望……あゝ彼の有名な白居易が「赤壁の賦」も此の良夜の賜なりしか……と、獨り奇異の感に打たれて取り留もなき荒想に耽りながら安藤坂を横に、傳隨院から右に折れて小石川の闇路へと足を踏み入れるのであつた。

時餘の後、僕は新らしい勇氣と歡喜の情に溢れて、とある坂上の一角に立つた。月は今し天心に澄み渡つて居る。胸の奧には一點細微の曇もない。暫らく歩を止めて天上の高を仰ぎ望むで居ると、何處ともなく三味の音、琴の爪音が遠く仄かに波立つてきた。一は輕早一は幽雅、動の音と靜の響とが一時に我が兩の耳朶を叩いて、去年の今夜獨り戶塚の樹陰に妙なる樂の音を聞き筑紫なる一人の懷かしき、友を思うた當時の樣も今、犇〳〵と胸に當る！

足は何時しか榎町を過ぎ、馬場下を左に折れて踏みなれた八幡の森を闇路に拔けて、亦もなつかしい戶山の原に出た。今が今迄薄暗い程茂り黑むだ樹影に包まれた自然の景色は俄に展開して心も自然と開放せられたかのやう。月は磨ぎ澄した鏡のやうに中空高く輝いて居る。松の姿大久保あたりの森の影、あるは燈火の點々として綠樹の影に見へつ隱れつ閃めき渡る、何とも云ひ切れぬ詩趣を湛えて居る。あたりは只もうひつそりとして晝間練兵の跡もなく深々と沈み返つて居る。餘りの壯嚴さに、思はず僕は足の歩みを止めて暫し默然として瞑想した。蟲の音が脚下に涼しく洩れ聞へてくる。仄かに馬子の鼻唄が波打つてくる。思はず此等美妙の樂音に聞き恍れて居た僕は、俄然我に返ると同時に、何だか知らん自分も一所に歌つてみたくなつた。と云つても詩才なく馬子の妙音なき此の身、勿論歌らしい歌の出やう筈はない。が不圖思ひ浮て口誦したのは榎本夫人が良人に書き送つたと云ふ一詩。

與君多年得同志。　闌夜和夢語丹誠。

七砲臺邊波萬丈。　帆檣影裡月三更。
一封欲寄相思意。　淚落枕頭靜有聲。

と見れば曠野の一角、黑い影が三ッ四ッ的もなう靜かに動いて居る。定めし今宵の月を此の原で親しく賞觀て居るものであらう。やがて再び獨唱したのが次の一節。

夕日は隱れて道は遙けし、行く末如何にと思ひぞ煩ふ。我が主よ今宵も共に居まして、寂しき此の身をはぐゝみ給へ…………………。

此の瞬時、僕は何の意味もなう秋のあはれな物悲しさを泌々と味つて、そゞろ寂寞の感に打たれた。おゝ今し福知山の營所に銃劍を握つて、久しく相面話するの好機を逸して居る親愛の友は、果して如何なる感想を以て今宵の月に對して居るのであらう。又九州の果てに敎鞭を採つて居る一人の愛する友は、如何に此の良夜の月を見るであらう……おゝ友……我が愛する友……彼等の中一人にても若しや我と共にありしならば………と懷鄕の念よりは先づ會心の友が先きに立つて、我れは云ひ知らぬ淋しさと悲しみ苦しみの渦中に投入して了つた。

折しも闇路を破る汽車の音、機關部からは手に取るやうな吐息の聲が切りに洩れ響いて來る。今し彼は蒸汽の力を強め、新らしい一倍の勇氣を以て人生の軌道を一目散に馳り行うとするのであらう。が如何にも切なささうな吐息の響は、宛然に此の世の痛手に苦むで、無理に我と我が身を勵まして居るかのやう。おゝ我が目下の境涯が左樣ではあるまいか……あゝさうだ。正しくさうだ……と思はず僕は獨語しつゝ何とも云へぬ美妙深秘の念に打たれて、月下に點々たる紅火を望み、靜かに我が家の門をくぐつて室に還ると、其の途端新らしい疊の匂がプンとする。眞暗な空氣が四邊に犇々と迫つてくる。けれども机の上には白うい何物かゞ載つけてある

やうに思つた。一時は心理の作用かとも思つてマッチを探かして居ると、親切な媼様が襖を開いて洋燈を持つてきて呉れた。室は今し光明に照らされた。光明はやがて喜び感謝の表情を持ち來したのである。

世には人間業と考ふることの出來ない事實が、屢々我等日常生活の上に表示せられるやうに思ふ。今の我れ——暗黒の裡、机上に何物ともつかず白うい一物を認めた——僕が丁度それなのだ。白い物は洋燈か光に照らされて終に其が本體を現はした。不思議と云はうか、奇怪と叫ばうか。今が今まで思ひ煩つて居た筑紫の友が長あい重い信書なのだ。それに又避暑地で撮つた一葉の綺姿までが添へてある——僕は喜び餘つて我れ知らず身を震はした。

此の夜幾回となく友の信書を熟讀翫味して深い友情の眞澄水を掬むだ。さるにても今し戸山の原の彼方、さも苦しさうな吐息を吐いて北進した汽車の響き。おゝ今はた何處にか新鮮活躍の力を現して居るのであらう。斯う思ふと僕の胸は此の夜云ひ知らぬ感恩隨喜の情に滿ち〳〵たのである。

（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人間の天性

ベエコン

天性は往々にして掩隱せらるゝことあり、或は壓倒せらるゝことあり、或は全く撲滅せらるゝことあり。天性に壓迫を加ふるは却つて數等之を激勢する所以也。教訓は唯た天性を謹愼ならしむるのみ。獨り習慣に至つては能く天性を一變して之を服從せしむるの妙力あり。故に天性を矯正するは習慣に依るに若かず。習慣に依つて天性を矯正するに習慣の過大なるも過小なるも共に不可也。何となれば前者は天性を脅迫して終に落膽に至らしめ、後者は其進歩を遲鈍ならしむれば也。又習慣は餘りに不斷的ならんよりは間歇的にして時々休息を加ふるを可とす。天性の矯正は容易に安心すべからず、何となれば一旦潛むと雖も時機に觸れ誘惑に乘じて再發するの恐あれば也。故に一旦矯正すとも容易に危險に近つかさるを可とす。凡そ人の本性は三種の場合に最もよく現はる。第一、獨居の場合、修飾なければ也。第二、忿怒の場合、謹愼を除けば也。第三新事實に逢遇せる場合、未だ習慣の指導なければ也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

YOUNG WOMEN

OF

JAPAN

Vol. V. *December, 1908.* *No. 11.*

Miss M.A. Whitman, Chairman

Dr. Kei Okami, Vice-Chairman

Miss A.G. Lewis, Recording Secretary

Mrs. G.M. Fisher, Treasurer

Miss Michi Kawai, Active Member of the World's Committee

Miss Sumi Miyagawa, Corresponding Member of the World's Student Christian Federation

Resident Members	Non-Resident Members
Miss A. B. West	Miss K. Tristram, Osaka
Dr. Tomo Inouye	Miss N. B. Gaines, Hiroshima
Miss Hama Hirano	
Mrs. Hana Ibuka	
Mrs. Koharu Nakajima	
Miss Uta Suzuki	

Miss A. Caroline Macdonald,

General Secretary

Headquarters :— 15 Dote Sanbancho, Kojimachi,

Tokyo

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

YOUNG WOMEN OF JAPAN

Vol V. Christmas December 1908. No. 11.

CONTENTS

Devotional Life of St. Paul..........En Kashiwai
An Interview with the Auther of "Namiko"...Editor
Immortality- (a Story)....................A. Goto
A Chapter from Victor Hugo.................Anon
My Friend's Home (a Poem).............Iyo Sakai
The Chikuma River (a Poem)...............H. Ino
The Cuckoo...........................S. Ihara
The Sunset View of Toyamagahara..........Okyosei
A complete List of the Contents of the *Meiji-no-joshi*, Vol. V.

東京神田美土代町三秀舍印

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

復刻版　女子青年界　第2巻
（原本誌名『明治の女子』）
1992年4月10日発行
本体価格　22、000円

発行者　船橋　治
発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
〒113　☎03(3812)4433
印刷所　三進社
製本所　青木製本所
中性紙使用
乱丁・落丁はお取り替えいたします。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA